

2021/1/30-2

## 掌編小説「子、親を選べず」その③



真之介君はお父さんとバスや電車に乗るのが嫌でなりませんでした。

それを言うのも、全くの初対面で見ず知らずの人でも、行儀が悪いと平気で怒ったりするからです。

お父さんの行っていることは間違っではないのですが、横にいと顔から火が出る程、恥ずかしかったからです。

なので、大抵はいろんな言訳を付けて成る丈バスや電車と一緒に乗らないようにしていました。

しかし、どうしても言い逃れできない時もあり、そんな時に限って「叱りつける現場」に出くわしたりするのです。

その日も駅に向かうバスの中で中学生くらいのお兄さん達が通路一杯に荷物を置き、足を投げ出したままゲームをしているのを見かけるや否や辺りをはばかり事なく

「くらあ、てめえらどこの学校のもんじゃない。お年寄りがたっついていらっしやるのに、おのれらあ、そんな格好してふんぞり返っておってええんか。あん？学校で一体何を教わったおのじゃあ二」

と大一喝。

赤の他人はおろか、親にさえそんな事を言われた事がなさそうなお兄さん達は、一瞬にして凍り付き、そそくさと居住まいを正して席を空けて、荷物も片付けました。

「全員立たんよか。おばちゃんは一人やけん」

そう言うど何人かを座らせた後、今度は杖をついたおばちゃんに

「おばちゃん席、空いたで。学生さん、譲ってくれはった」

というど、杖をついたおばちゃんを席に座らせました。

しかし、おばちゃんは却ってばつが悪そうで、お礼を言うどころか迷惑そうな顔をしていましたが、お父さんは一向に気にする様子はありません。

バスが駅に着いて降りた後、お父さんは真之介君にいいました。

「連中もあかんが、それを見て見ぬ振りして何も言わん周りの大人はもつとあかん。誰も注意せんから、あの子らも、そんなに間違った事しているとは気づきもせんねえやろう。」

今の子を台無しにしとうのは、わしらおとな世代だわ」

確かにやっている事自体は、先にも述べたようにいつも正しいのですが「現場に遭遇する」と居ても立ってもいられない位、恥ずかしさに全身が覆われ、思わず又

「この人僕のおとん、ちゃいますう。しらん人ですう」

と叫んで逃げ出したくなってしまふのです。

そういえば、以前お父さんは、自分の小六の時代の話で、九州から遊びに来た親戚の中三の従姉妹が電車の中で痴漢に遭った時、痴漢男の手首をむんずと掴んで捻り挙げた後

「あんたあ、なんば、しちよつとね。ざあけんじゃあなかと」

と一喝。

それを見て隣にいたお父さんは、赤面して思わずお姉さんから飛び退いてしまったといっていたのに、いつから性格が真反対になってしまったのか、不思議でした。

「一体、おとんは、どこでどうなってまもうたのか」

真之介君は恥ずかしいやら、なんとなく自分が情けないやらで、複雑な気持ちになりました。そうして

「やっばり、他のお父さんだったらよかったのになあ」

と改めて思いました。

(完)